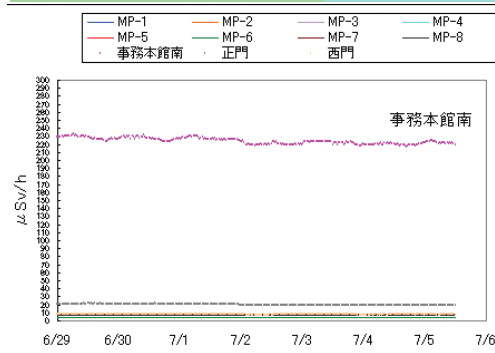


構内放射線量は安定継続

福島第一原発 最大 220 μSv/時

東京電力・福島第一原子力発電所サイト(II上図)の施設外の現在の空間放射線量(II下図)を示す。炉心溶解を起した1~3号機での循環冷却も順調に安定した状態を保っており、モニタリングポストの数値も安定した数値を示している。

事故後ほぼ一年四か月たった七月五日現在、原子力発電所の安定化作業の拠点となっている免震重要棟の前の「事務本館南」での仮設モニタリングポストの値が最も高く、約二百二十μSv/時。炉心損傷を起した1~3号機からさらに遠い正門の仮設モニタリングポストでは、約二十μSv/時となっている。



大飯4号機が再稼働へ

関西電力

関西電力の大飯発電所4号機(PWR、百十八万kW)は十八日二十一時、原子炉を起動、翌十九日六時に臨界に達した。諸試験を実施し、二十一日にも調整運転を開始、八月下旬に本格運転となる予定。

同機は、一一年七月の定期検査入り以来、およそ一年ぶりの再稼働だ。福島原子力発電所事故後、定期検査で停止中のプラントが再稼働するのは、同3号機に続き、二基目となる。

今夏は、七月に入ってから、ほぼ全国的な猛暑に見舞われており、冷房使用に伴う電力応需のため、安全確保、地元の理解を大前提に発電炉の戦列復帰が待たれるところだ。



過酷災害対策ロボット公開

千葉工業大学

千葉工業大学は十二日、過酷災害対応ロボット「Rosemary(ローズマリー) (II写真)」を公開した。

公開した。現在、福島第一原子力発電所内に投入されている「Quince(クイーンズ)」に続く災害対応ロボット。撮影用カメラが二、三、一基の高さまで伸縮可能となり、汚染水の水面が反射しないよう位置を調整して撮影できるようになった。積載量も六十キまで、重量を搭載しても階段を昇降することが可能。またサーモグラフィを搭載し、室内の温度を正確に把握して危険を未然に防げる。

ゴットフリード・ワグネル賞

放医研チーム

優れた日本の若手研究者の支援と日独間の産学連携を促進することを目的として、在日ドイツ商工会議所とドイツ企業十社が創設した第四回ドイツ・インベーション・アワード「ゴットフリード・ワグネル賞」の受賞者が六月十九日に発表され、放射線医学総合研究所分子イメージング研究センター生体イメージング技術開発研究チーム(チームリーダー山谷泰賢)の「がん診断と放射線治療を融合するOpenPET」が最優秀賞を受賞した。

照射全方向から可能

北大他 X線治療システム

北海道大学、ベンチャー企業のアキュセラ、国立がん研究センター東病院、京都大学、日立製作所のグループは六月二十六日、従来品より小型かつ高精度なX線治療システムの試作システム(II写真左)が完成し、従来品より約半分の強度を実現したと発表した。新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)が二〇一〇年度から取り組んでいる「がん超早期診断・治療機器の総合研究開発プロジェクト」の一環。これまで絞り込めるようになり、さらに装置が小型化することで従来不可能だった立体角三百六十度に近い方向からのX線の照射も可能となった。

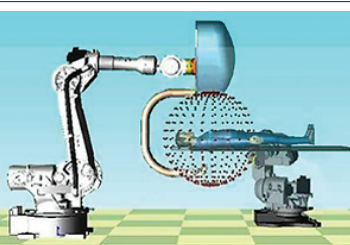


また、北海道大学が開発した高精度な動体追跡装置により、身体

の中で複雑に動く臓器の微小ながんもリアルタイムで高精度な追跡ができ、小型加速システムを組み合わせることで、X線量を極度に集中化させ、全方向からの照射(II図右)で体内深くに存在するがんを、他の正常な臓器に影響を及ぼさず治療が可能となる。

コスト面でも、従来のガントリ型X線治療装置と比べて約二分の一の価格が見込まれ、多くの医療機関での活用が期待される。

今後、二〇一三年度までにX線治療システムの統合を終了し、動作確認評価を実施した後、薬事申請に向けた準備を進める。



TENEX

Leading Supplier of Nuclear Fuel Cycle Goods and Services



株式会社テネックス・ジャパン
TENEX-JAPAN Co.,

東京都港区虎の門5丁目11番2号 オランダヒルズ森タワー14F
(Tel) :03-5776-1511 (Fax) :03-5776-1512